

宮澤喜一さん（元内閣総理大臣）に聞く

津島・池田蔵相の秘書官時代

―聞き手・国正武重―



バカヤロー解散による第26回総選挙（4月19日）で再選された大平代議士と第3回参院選（4月24日）に初当選した宮澤参院議員（1953年夏）

津島蔵相秘書官時代の会話

去 華 — 宮澤さんが大平さんとしょっちゅう顔を合わせるようになられたのは、一九四五年（昭和二〇
年）八月の敗戦直後、東久邇宮稔彦内閣の大蔵大臣・津島寿一さんの秘書官になられた頃とうかがつ
ていますが……。

宮澤 私が大平さんといつも一緒になるようになったのは、四五年八月一六日、終戦の日の翌日か
らです。津島さんは秘書官に同郷（香川県）の後輩の大平青年を選ばれた。そして、私も大平さんか
ら手伝いをしろといわれて、その日から手伝いをはじめたわけです。最初にしたことは、大蔵大臣官
邸は焼失していたので家探しでした。東京・狸穴まみあなの満鉄（南満州鉄道）関連の家を借り、官邸にした
のです。

— どういう話をされていましたか。

宮澤 二週間ほどたったある日、大平さんと私は狸穴の小高い芝生に座ってぼんやり焼け跡を眺め
ていました。焼け野原で、前方には芝浦あたりの海がキラキラ光っていたのです。私たちも虚脱状態
でしたが、しばらくして大平さんが「宮澤君、これで日本は何もなくなりました。これからどう
やって日本人を食わせるか。外地から帰ってくる人も多いだらう。何百万人が餓死しなければ日本は
生きられないかも知れない。すべてが止まってしまった今の日本で、鉄道だけがとにかく動いている。
この鉄道を担保にしてアメリカから金を借りる手はないだらうか」と言ったのです。

その時、私は、以前にアメリカの富豪アペレル・ハリマン氏が満鉄を担保にして金を貸すという話

があり、それが大平さんの幻想を生んだのかな、と内心思ったが、黙っていた。これが二人が会話をした最初だったということ覚えています。連合軍最高司令官のダグラス・マッカーサー元帥が日本に進駐する少し前のことです。

——大平さんにしては、よく話をしていたのですね。

宮澤 その頃の大平さんは、後に政治家になった時と違って、わりにいろいろな話を私にしてくれましたね。私も甘えていろいろなことを聞いたのです。ある日、「あなたは役人にならなかつたら、いったい何になっていたんでしょね」と言ったら、意外にも「自分は住友という会社に入りたかつた」と話された。自分の故郷には、住友・別子銅山があつて四阪島の製錬所の煙を見ながら学校へいつていたからだ、と言つのです。実はそれよりも住友には無教会派の内村鑑三さん（キリスト教伝道者）の影響を受けた人がたくさんいるんだ。矢内原忠雄さん（のち東大総長）なんかもそうなんで、自分は実は高松高商（現・香川大学）一年の時にキリスト教を信じるようになった。東京に来てからも毎週末には、矢内原さんの家に話を聞きに行つていた、ということなどを、さらりと話されました。その後、宗教のことはほとんど話されませんでした。

——大蔵省の先輩の池田勇人さんが四九年一月の総選挙で衆議院に初当選され、いきなり第三次吉田茂内閣の大蔵大臣に抜擢されました。この時、池田さんは蔵相就任にあたり、宮澤さんと黒金泰美さんを秘書官としましたが、黒金さんは三カ月後に仙台国税局長に転出される。そこで、同年六月に大平さんが秘書官事務取扱となり、再びコンビを組むことになり、同時に池田 大平 宮澤ラインのスタートとなつたわけですね。

宮澤 あれは昭和二四年一月だったかな。池田さんに信濃町のうちに呼ばれた。「何ですか」と言ったら、池田さんは「俺は大蔵大臣になる」と言う。「ヒエー」と思わず言ってしまったが、池田さんにしてみれば多分、吉田総理から言われて、もう大丈夫だと思っただけでしょう。「だから手伝え。これからはアメリカとやんなきゃならない」と言う。「それは手伝いますよ」ということになったわけだが、「もう一人、黒金も秘書官になるから頼む」と。

黒金さんは、もうその頃、政界に出る気で、次の総選挙に故郷の山形からの出馬に備えていました。黒金さんが仙台に行くことになった時、池田さんが、「宮澤、後はどうするか」と聞くので、「それは大平さんです」と答えたのです。池田さんは、「しょうがないかな。(大平を) 掴まえてくれ」。ただ、彼は、その時は安本(経済安定本部)の公共事業課長をやっていた。これは、とつても遊べるポストでいいですよ。全国、遊んで歩いているんだから。(笑い)

——それで大平さんが秘書官に……。

池田蔵相秘書官としての仕事ぶり

宮澤 大平さんは下交渉の段階から「冗談じゃない」と逃げまわっているわけです。ちょうど、黒金さんの辞令が出た時、大平さんは鹿児島に出張していました。池田さんは、せっぱつまって、「大平にすぐに帰ってこい」と電報を打て」と言う。そしたら、折り返し、大平さんから「ゴオンコシン シヤスルモ、ココロチチニミダレテケツシンツカズ、キキョウマデゴウヨヲオネガイス」との電報がきた。でも、「ゴウヨ」なんて、もう事はあしたみたいいな話だ。「ふざけんな」というようなこと

ですね。結局、しばらくして帰京したわけだが、まあ池田さんのことだから、大平さんに「お前には細かいことはさせない」とか、「細かいことは宮澤がやる」とか、「毎日、出てこなくていい」とか、そう言ったかどうか知らないが、それに近いことですよ、決まっているんだ。

——それで、大平さんはとうとう顔を出されたわけですか。

宮澤 そう。いやいやながらね。私はまあ近廻りのことをしょっちゅうやっていて、連合軍総司令部へ行ったりなんかして……。大平さんはいえは、あの人のことだから四谷にあった大蔵省に出てくりや、まあ秘書官室でストープに当ったりして。また悪友がくるわけだ。あの「九賢会」、九人の賢人と自ら称して、伊東正義さんとか、佐々木義武さんとか、村田恒さんとか。まあ簡単に言えば皆、大変な人物だし、遊んでばかりいると、言えば言えるわけです。皆ほとんど役人みたいなもんですからね。それが秘書官室にやってきて、まあ「処士横議」だな。それをしちゃ、マージャンをやつてね。池田さんが言うとおり、大平さんは、一向につまらない仕事はしないんですよ。しないけれども、あの人のことだから、何かの時にはちゃんとやっていて、池田さんも頼りにしていたね。

そのうち、もう一人、秘書官手伝いみたいな形で稲田耕作氏がきた。大平さんはいよいよ、「俺は何もしないでもいいよ」と、高級顧問みたいなことになったわけです。主として思想をもって仕えていたわけですね。（笑い）

——大平さんは、きちんと勤務時間にお見えになったんですか。

宮澤 いや、そんなことはなかったですね。だって、そもそも時間ていうのが、池田さんの家から始まることが多いですからね。時間には、あまり拘わらない、高尚な思想をもって仕える。安岡正篤

ではないが、みたいなもんだな。本人はどうも学生時代から苦学したり、キリスト教の布教をやったりしてね、いわゆるエリート官僚になるという心構えでいたようではなかったですね。まあ、行くところまで行きゃ、うまく行きゃ、似たようなもんだと。しかし、大蔵省では人望があったですよ。とくに若い人にね。

——大平さんは一九五二年（昭和二十七年）一〇月に行われた第二五回衆議院選挙で自由党公認で初当選されたわけですが、政界入り前後の様子はどうだったのですか。

政界入りを決意した状況

宮澤 多分、公共事業課長をやったせいもあるけど、役所の権限の強い時代ですから、郷里からも陳情に来ていて、そして「これはあの……」という接触が、自然に秘書官室でできるんですよ。相当地な実力者でもあったから、陳情に応じるだけの力量はあるわけであつてね。そんなことが動機になったことは確かだと思います。原因は多分、国や郷里の行き先を案じていたんでしょう。

——ご本人は、大蔵省にいたとしても、五〇歳を過ぎればさっさと退かざるを得ない。それに、東大法学部出身者が主流の大蔵省で、東京商大（現一橋大）出のオレは……という気持ちで底流にあったのではないのでしょうか。

宮澤 そういうこともあったと思いますね。ことに、この人は、どういうふうに言えばいいかな。まあ、これほどの人ですから、役人として、どれだけ成功するか、本人もまあ役人としてあんまり、まともに成功しようというふうではなかったでしょう。

——ところで、一九五一年（昭和二六年）夏、池田、大平、宮澤、登坂重次郎（池田氏の秘書）の四氏が柳橋の料理屋で飲んだ後、隅田川に舟を浮かべたことがあった、と聞いています。その時、大平さんが突然「大臣、俺もひとつ政治家になってみようと思いますが、どうでしょうか」と切り出したそうです。すかさず池田さんが「それはいいじゃないか。キミなら政治家にはびつたりの性格だ。ところで、カネはいくらぐらいつくれるのかね」と。そしたら、大平さんが「このぐらい」と答える、池田さんは「じゃあ、あとは俺が面倒をみてやる」ということになった（登坂氏の残したメモ）
そうですが……。

宮澤 多分、本当じゃないですか。昭和二六年というサンフランシスコ講和会議の年ですね。お金はね、当時、志げ子夫人の実家（岳父・鈴木三樹之助氏と三木証券）もあるし、彼が学資なんかの面倒をみてもらった神崎製紙社長の加藤藤太郎氏とかなんとか、そういうところからの支援もあったでしょう。「紙」なんてものは、とても景気が良い時であったから。その辺から勧められたのかなあ。「お台所の面倒はみます」ということ²で。

——黒金、大平、宮澤の三氏は「秘書官、三羽ガラス」と言われましたが、黒金、大平両氏の接点はあったのでしょうか。

宮澤 それがね、ないんです。あんまり昵懇ではなかった。黒金さんは大蔵省では大平さんの上級生で、なかなかきびしかった。大平さんしてみると、「黒金は、さすが侍の息子だ」なんて言っているし、黒金さんは黒金さんで、「大平は、たいしたもんだ」なんて言っていたけれども、本当に仲が良かったわけではない。

——六〇年（昭和三五年）七月に第一次池田内閣が成立して、大平さんが内閣官房長官に就任される。政権のキャッチ・フレーズに「寛容と忍耐」が打ち出され、次いで、六二年七月の第二次池田内閣では「国民所得倍增計画」が決まり、同時に宮澤さんは経済企画庁長官に、大平さんは外相に就任されたのですが、これらにお二人はどう関わられたのですか。

「忍耐と寛容」は二人でつくった

宮澤 それは、かなり関わったと思うんです。岸信介内閣が安保闘争で退陣した後、池田さんが継いだ。その時、いろいろあつたけれども、例えば、笠信太郎氏（朝日新聞論説主幹）は僕を呼んでだね、「こういう修羅場の後は、池田みたいに唯我独尊では駄目だ。やっぱり人柄の人が継がなきゃならんから、それは石井光次郎（第一次岸内閣副総理）だと思う。池田君にそれを言つて下さい」と言うわけ。そこで僕は、「それは言いますよ。言うのはいいですよ」と言つたんだ。池田さんは少しも喜ばなかつたが、そういう雰囲気だから、「池田さん、あんたなつたと思わず、ここはよつほど姿勢を低姿勢にしなきゃ」と。それでまあ、キャッチ・フレーズは「まず忍耐だ」と大平さんが言つて、「一つだけでは足りないんだなあ」と思つて、「寛容」というものを私が思いついたんです。

私は中学生の頃からジョン・スチュワート・ミルなんてのを生意気に読んでたもんですから、「やつぱりトーレランスというのは非常に大事だから、寛容をくつつけたらどうですか」ということになつたんですね。だから、しごく低姿勢で、「ゴルフは止める。芸者のおるお座敷には行かない」と。まあ半分、本当ですわな。（笑い）というような演出をして行つたわけでしょう。

——池田内閣の番頭役としての大平さんは、その支えとか重しになったのでしょうか。

宮澤 なったと思いますね。とにかく、池田という人は、まあ、そういうことになったわけだから、やっぱりあつちこつちから弾が飛んでくる。まだ(当選四回の)若造のほうですからね。歴戦の雄ではあるけれども、やっぱり大平官房長官というのは、あたりが柔らかいし、受けとめ方は広いというか、池田さんに言わせれば、「お前(大平さん)は、ずぼらだ。もっときりっとしろ」だけれども、それがあの人の持ち味なんですから、それで保ったのでしよう。

——一九六五年(昭和四〇年)八月に池田さんが亡くなられた。それで、前尾繁三郎さんが二代目の宏池会会長になられる。そして、前尾さんは「ポスト佐藤栄作政権」を目標して自民党総裁選に挑戦したが、いずれも失敗する。そのため、七一年(昭和四六年)四月には大平さんが宏池会の第三代会長に就任するわけですが、二人の関係を宮澤さんはどうご覧になっていましたか。

宮澤 両方とも韜晦して、褒めているような関係ですね。しかし、両方ともなかなか鋭いから。前尾さんのほうから言うと、時々、大平さんがチラッと見せる、一種の韜晦術かな、それが「俺には通じないよ」という受け取り方になるんだね、これ、結局ね。

——池田さんと前尾さんの場合は、兄弟分ですよ。

宮澤 これはね、池田さんにするさがないからね。あるんだけど、すぐばれるから、いいんだ。(笑い)ところが、大平さんは、なかなか韜晦するからね。前尾さんしてみると、「そんなことで俺は騙されないよ」というような意地が出るんだな……。

——池田さんは、その辺りの大平さんの性格は知り尽くしておられたのですか。

実 就 華 去
宮澤 いや、騙されちまうよ、大平さんになら。池田さんは、そういうところは、もう全く、「ど
うだ。俺は、そんなことに騙されないぞ。見ろ」という程度の、あっけらかんですから。

——天真爛漫な人でしたからね。(笑い)

宮澤 ええ。まったくそうです。「こつやつて騙してきて、うまいだろう」なんて言っている。だ
から、池田、前尾両者というのは、これは本当にいいんだけれども、それでも池田内閣になって、前
尾さんが少しも池田さんの所に行かない。自民党幹事長でありながら、行かなくても、前尾さんには
全部、判るわけ、相談なんかしなくてもいい。じつとしてやっているんだが、池田さんしてみると、
「皆が尻尾を振ってくるのに、前尾はちつともこないじゃないか」と、いう程度の隙間ができるわけ
ね。だけど、基本的にこの二人はぶつかるところがないから、ケンカにはならないんだな。ところが、
前尾、大平の二人には、あつたな。

——そのことは、前尾さんから大平さんへの宏池会会長ポストのバトンタッチの最終局面でも、感
情的に緊迫したシーンがありましたね。

宮澤 そうですね。前尾さんは本当に病気また病気だったからね。大平さんに見れば、あんな
に(前尾さんは)酒を飲んじゃ、どうにもならんじゃないか、と思っているかも知れないんだけども。
まあ、本当に病気は病気なんだけれども、病室に三味線を持ち込んだりしているわけだから。(笑い)
三味線を持ち込んで、「おい、ちよつと唄えよ」と、僕が見舞いに行った時にあつたりして……。そ
んなふうだったからね。

——大平さんは、病室に顔出しもしない。

宮澤 さあ、どうだったかな。あんまり顔を出した形跡はなかったですね。

——一つ伺いたいののは、田中 大平の関係です。大平さんが亡くなられた後も、田中角栄さんが、瀬田の大平邸に顔を出し故人の遺影にぬかずいている姿を見受けましたが、二人の関係をどうこうらんなってしまいましたか。

宮澤 大平、田中の二人は本当に尊敬し合っているところがありました。大平さんは、「あー、とてもあれだけの才能は俺にはない」と、はっきり思っていた。一方、田中さんは、「あんな無欲な、ふわふわして、よくやれるもんだ」と思っていましたですね。これは、僕はね、本当にお互いにならないものを尊敬し合っていたことは、まず間違いないと思う。それも欲得を離れてね……。

——「政治家・大平正芳」という人の素顔を、どうこうらんなってしまいましたか。

大平さんは権力闘争が嫌いだった

宮澤 何が嫌いって大平さんは権力闘争ほど嫌いなことはなかった。大平さんが最も苦しんだのは、実は最後の年になるのですが、一九八一年（昭和五五年）です。その前年の総選挙後、自民党内で、いわゆる「四十日抗争」があつて、なかなか内閣ができなかった。八年には党内分裂で大平内閣不信任案が可決されて衆参同日選挙ということになるのですが、これはもう大平さんにとって耐えられないほど苦しかった。

その頃、私は滅多にこんなことしたことはないのですが、ある朝、大平さんの家に行きました。それで、「私は何の役にも立たないけれど、あなたが権力闘争してらっしゃるんじゃないことだけはよ

実
華
就

く分かりますから、どうかそれだけは氣にとめないで頑張ってください」と言った。その時、大平さんは、「まあ、これだけ喧嘩を売り込まれると、もうどうしようもないんでね」と、慄然とした表情でした。

去 — その苦しみからでしうか、衆参同日選挙の最中の八年六月一二日に急逝されますね。

宮澤 大平さんの死に方は、本当に気の毒だった。不本意ですよ。あの当時の彼の煩悶というものは、病気に必ず関係があると思う。そして、どこかでやっぱりクリスチャンのところがあるんですよ。

— クリスチャンということでお質ねしますと、キリスト教と大平さんというのは……。

宮澤 大平さんの考えはこうであつたのではないですか。「キリストということんでもない偉い人がいて、その周りにいい人もいる、悪い人もいる。賢者もいるし、政治家もいるし、予言者もいるし、マグダレのマリアのような遊女もいる。そういういろんな人がキリストに叱られたり、教えられたりしながら、少しでも人に親切にしよう、少しでも貧しいものに分け与えよう。そういうふうに努力している社会が、それが神の社会というものであつて、本当はそういう極楽のような社会は来ないんだ、来たらもうみんなが退屈してしまうから、キリストはそんな無慈悲なことはなされないんだ」と。この辺は、大平流なんですけれども、そういうお話で、したがって「永遠の今」というのは、そういうことなんだということ、私にずいぶん言われたことをよく覚えています。

— 大平さんは人と争う、権力闘争は大嫌いというのも、そのあたりから……。

宮澤 ですから、大平さんは人と争うことが、とても嫌いで、争いになりそうになったら先に逃げ

てしまふ。そういうことは政治家になってからもありましたけれども、逃げられない時もたまにありました。

例えば、一九七二年、日中国交回復のため田中首相が訪中されたが、その時、大平さんは外務大臣。台湾との関係を打ち切つて日中正常化をやるのですから、自民党内は賛否両論、大変なことになった。党総務会や関係部会などでは机や椅子が飛んだり、文字どおり罵詈雑言。大平さんは、その頃、確か腎臓結石かなにかをしまして、身体の調子は悪かった。そこにもつてきて、日中、日台問題をめぐつての罵詈雑言、これはもう、大平さんが一番耐えられなかったことだと思ふ。だが、大平さんは耐えて、七四年一月には日中航空協定締結のため再訪中、毛沢東主席、周恩来首相と話をして帰つてこられた。

よかつたなと思つていたら、瀬田の私邸が焼けてしまった。突然の出火で蔵書など大事にしていたものが、みんな焼かれてしまった。幸いご家族に怪我はなかったが、私はその時、国会内で大平さんに会い、「大平さん、この火事というのは決してなんにも関係ないことなんで、宿命的な考え方をしないで下さいね」と、生意気なようなんですけど、そういうことを言つた覚えがあります。

——権力闘争が嫌いであり、権力欲もなかった人だと思ひますね。

大平さんが口にしていたヨハネ伝の言葉

宮澤 大平さんは若い時から、ヨハネ伝にある、「一粒の麦死なずば、ただ一つにてあるらん。麦が地に落ちてそのままであれば一粒だけだ。もし、死ねば多くの実を結ぶべし」という言葉を口にして

実 いました。八 年の衆参同日選挙の結果は自民党の大勝で、大平さんは図らずも、自分の好きなヨハ
就 ネ伝のキリストの言葉をそのまま実践してしまわれた。しかし、それができたときは、大平さんの苦
華 しみが、またすっかり無くなった時でした。ね。権力欲というのは、権力闘争が嫌いなお蔭というかな。
去 それでまあ、神の下の平等だ、というようなところはあはるし……。

それから、あのどう言うんでしょね、政治権力であれこれ差配をしようというようなことも、大
平さんは基本的にその効果に疑いをもっているから、みんながベストのところを動けるようにするの
が政治の役目と強く信じていました。ただ、大平さんの場合は、いちばん最高の位置に立った時に、
もつとも不本意な日を送ったということではないでしょうか。

(平成十一年一月十九日、大蔵大臣室で取材)

〔註〕

(1) 大平さんは、池田蔵相の秘書官就任のいきさつについて、自著『財政つれづれ草』(如水書房・一九五
三年刊)の二〇〇―二〇一頁で、次のように記している。

昭和二四年の五月下旬のことであった。経済安定本部の公共事業課長であった私は、偶々南九州地方を
旅行していた。その途次、私は鹿児島県庁に重成知事を訪ね、岩崎谷別荘で知事と夕食を共にしていた時
であった。宴酬わの頃、重成さんから一通の電報を渡されたのである。「キクンヲヒシヨカンニキヨウシ
タシ、イソギキキヨウセラレタシ、イケダ」というのであった。全く予想もなかったことであつたの
で(事実もう秘書官でもあるまいと思ひ切っていた)、私は恩義と自負のあいだをあれやこれやと考えさ
せられて、その夜はまんじりとも出来なかつた。翌朝、池田蔵相宛に「ゴオンコシンシャスルモ、ココロ
チチニミダレテケツシンツカズ、キキヨウマデゴユウヨオネガイス」と返電した。そうしておけば、大

蔵省の同僚が何かと心配して、お役ご免にしてくれるだろうという期待も手伝って、ゆっくりと残りの旅程を歩いたのである。霧島から都城、宮崎、延岡を経て別府に辿り着き、そこで二日間ゆっくり湯につかって、人目にたたないようにコッソリ帰京した。帰京後、声をかけて下さった御挨拶のつもりで、大臣室に池田蔵相を訪ねた。そこで私は、「私を秘書官にという折角の御所望ですが、大蔵部内にはより適任者が雲のようにおります。私が最適任者を物色して推薦申し上げますから、私の起用だけは御勘弁願いたい」と申し出た。笑って聞いていた池田蔵相は、「いや、もう一週間も前にちゃんと君を秘書官に発令してある。わしが大臣をやる以上、君が秘書官をやるのは当たり前のことではないか。何もしなくてよいから、じつと隣りの部屋で坐っていてくれたらそれでよいのだ」という口上であった。私は返す言葉もなく、それから秘書官室の主人となったのである。

(2) 大平さんは、「政界進出」を決意した当時の状況について、『財政つれづれ草』の二三三頁で、次のように記している。

昭和二六年八月、私は池田大蔵大臣の配慮で三カ月ほど米国に出張することになった。池田さんとしては、自分の身辺に私がないことによる不便を忍んで、極力、私に外遊を勧めてくれ、自らその手配をとってくれた。ただ彼は私にどうして外遊させようとするのか、つまりその目的については一向に明かさなかった。「講和会議もあり、いい機会だから行っておいで」といわれただけである。「何時立つのですか」と聞きただせば、「これから一週間もすれば立つてはどうか」と言われた。そこで私は急いで旅装を整えて、八月一三日、羽田空港を立つて渡米したのである。十月下旬に帰国してみたら、当の池田さんは「もうこれから大蔵省の方の仕事は心配しないでよいから、できるだけ郷里に帰って、郷里の人々と顔馴染みになるんだ。いつ衆議院は解散になるか判らんよ」と念を押された。そこで私は、初めて池田さんが私を渡米させた真意をよみとることができた。当初、池田さんは、「君は政治家になってはいけない。君のような

型の人物は官界に乏しいのだから、自分としては君が大蔵省に残つてくれることを希望する。絶対に政界進出など考えてはいけぬ」とよく言い含められていた。私は彼のこの豹変に驚いた。

宮澤喜一（みやざわ・きいち） 一九一九年、東京都生まれ。東大法学部卒、池田勇人蔵相秘書官をへて、五三年参議院議員に当選。経済テクノクライトとして、池田、佐藤、福田内閣で経企庁長官や通産相を務める。六七年、衆議院議員に転じてから三木、鈴木、中曾根、竹下内閣で、外相、官房長官、蔵相を歴任し、九一年、総理大臣に就任。現在は小淵内閣、森内閣の蔵相。大平正芳記念財団発足当初からの評議員。著書に『東京ワシントンの密談』『新・護憲宣言』などがある。